## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	序
Sub Title	
Author	山田, 辰雄(Yamada, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication	1997
year	
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and
	sociology). Vol.70, No.12 (1997. 12) ,p.5- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	内池慶四郎教授退職記念号
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara id=AN00224504-19971228-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 序

定年は避けて通ることができない。先生が法学部助手に就任されたのが一九五七年であるから、四○年の長きに また学者らしい学者が一人、三田の山を去る。内池慶四郎先生は一九三二年生まれであるから、来年に迫った

である。そのことを十分知りつつも、私にとって内池慶四郎先生は超俗の人である。先生は世事を避けることな て仕方がない。確かに、定年は淋しさを伴う一つの関門である。先生も人としてこの関門をくぐり抜けなくては に基づくものなのか、私にはわからない。自らの小人ぶりを意識するとき、そのような先生の生き方が羨ましく わたって法学部で研究と教育に携わってこられたことになる。 人にはそれぞれ心の葛藤がある。そのことをわきまえずに人を評することは本人にとってまことに迷惑なこと なおかつそれにこだわらない。このような姿は生まれつき備わったものなのか、あるいは長年の人生の経験

ならないとしても、そこを抜け出したとことにそれとはかかわりなく先生の世界が存在する。

内池慶四郎先生の民法学の核心は時効法の研究にある。先生の研究の特徴は、

日本民法成立の沿革や立法趣旨

福沢賞が与えられた。

を受賞された。

この時 期 ドイツ留学は、これまでの日本における研究に加えて、 0) 研究成果は 『出訴期限規則略史 -明治時効法の一 系譜 若き日の先生の民法研究に大きな足跡を残した。 に結実し、 先生は本書によって義塾賞

理と歴史的課題』 うとする学者が多い ちつづけることがい たい。これらの研究は、 内池慶四郎先生はその後 の二冊の大著として近年刊行された。これらの著作を含む先生の学問的業績に対し、 なかで、これほどまでに一つの問題を究めようとする先生の情熱と学問的良心に敬意を表 かに困難であるか、 消滅時効法に関する『不法行為責任の消滅時効 貫して時効法の研究に没頭された。 われわれが経験しているところである。 若き日に抱いた学問的関 —民法第七二四条論』、『消滅時 とかく右顧左眄して時 心を長期にわ 栄誉ある たって持 に乗ろ 効 の原

た。 は 誉教授とともに、 の最初の海外留学生であり、 うことにあった。 『神戸寅次郎民法講義』 .池慶四郎先生のい 神戸博士の当時の民法の講義ノートを再現するという大変な作業をなされた。このような努力 神戸寅次郎博士の学説の再評価は、このような先生の仕事の一環である。 ま一つの学問的関心は、 (津田利治共編)、『法律学者神戸寅次郎― 精緻な民法研究で学界で指導的立場にあった先達である。 法律学科の学問的業績をいかにして継承、 慶應義塾の知的伝統 内池先生は、 発展させて 神戸博士は法律学科 ―』となって現れ 津田 < |利治名 か

言であり、 ちらかというと寡黙である。 してい ]池慶四 る 学部を思う心情にみちている。 その背後には、 .郎先生のこの問題に対する取り組みは単に個人的な学問上の関心から出たものではない、 法律学科の学問をい しかし、 時には学部の会議においてされる先生の発言は、考えに考えたあげくの 先生の法律学科の学問の再評価の仕事はこのような心情と結びついた かに再構築し、 発展させていくかという思いがあった。 と私 先生 は 理解 はど

界において先生とより意味のある会話ができるような気がする。

最後に、先生の気持ちを察することなく、先生に対する私の思いを書かせていただいた。

事、 て、 塾の学問を代表する図書館長の職がもっともふさわしいような気がする。それも定年を目前に控えて退かれた。 グ部部長、 内池慶四郎先生は、 文部省科学研究費助成委員などを務められた。また、塾内にあっては、 内池研究会は多くの優れた研究者を輩出したことで有名である。塾外にあって内池先生は、 四年にわたる激職を終えられた先生に対し改めて慰労の言葉を申し上げたい。 評議員、 メディアネット所長・兼図書館長などを歴任された。 以上の研究以外に、塾内外で多くの要職を歴任された。先生の自由で温かい人柄と相まっ 内池先生の重厚さを考えると、 司法研究室室長、 体育会フェンシン 日本私法学会理 慶應義

交わすこともある。 私はかつて内池先生夫妻と宴席を共にすることがいくたびかあった。時には学部の先輩として日常的な会話を それにもかかわらず、先生に対する尊敬の念は止まない。 しかし、それは普通の会話であって、なかなか先生の味わい深い人柄に接することはできな

世界がある。 愛読した稲垣足穂の世界に似ている。足穂は寡作な作家であるが、私はその的確な表現が好きである。 をたくましくすれば、 おられるところを遠くから見たことがある。 ったわけであるが、 な描写は、 先生には、 趣味の一つとして有名な紙ヒコーキがある。 日常的な普通の会話のなかよりも、現実とそれを越えた世界とのあいだを往復する想像の世 いつの間にか世俗を離れた星の世界、 先生のヒコーキは宇宙に吸い込まれて戻ってこないような気がする。そこに先生の超俗 法律家としての鋭い現実感覚と現実を離れて遊ぶ精神が混在している。それは、 ヒコーキは必ず地上に戻ってくる。しかし、ここで現実を離れ想像 小宇宙に引き込まれていく。 かつて私も、先生がヒコーキを飛ばして楽しんで ここで私は内池幻想を語 現実に対 か つつて

しかし、

いま

一九九七年一二月

法学部長

山田辰雄

実に戻るとき、私は内池慶四郎先生がこれまでと変わらぬ学究生活を元気に続けられることを願ってやまない。